御かぐら歌鳴物譜

下

太鼓
拍子木
笛

特257
758
4
9

始

特257
758

御かぐら歌鳴物譜

打物及管

太鼓
拍子木
笛

下

宮内省圖書寮

はしがき

御かぐら歌に

やまのなかでもあちこちとてんりわうのつとめする

と仰せ下されてあるやうに、やがて『三千世界は陽氣手踊り』で眞實の感喜生活が送らして頂けるやうになるであらうと思ひます。

然るにその陽氣手おどりに使用せられる鳴物については、從來餘りに閑却視せられてあつた傾きがありますが、いつも舞人（お勤衆）と、地方（鳴物衆）とは須く、はなれ〳〵であつてはならんものと思ひます。

そこで神様も

『心の調子を合せ』

と仰せ下されてありますが、これは御かぐら勤め鳴物について御伺ひなされた時のお言葉であつて、その當時の信仰からすれば、唯心の調子さへ合せれば、鳴物の調子などはどうでもよかつたのも知れません。

然し、御かぐら勤めには、その舞人があり、その地方がある限り、鳴物の調子も自然に合せて行かねば、如何に心の調子を合せやうと思ふても、それは出來得ない事であらうと思ひます。

言ひ替ましたならば、心の調子を合せるといふことは、引いては鳴物、そのものゝ調子が合ふて來るといふことを仰せ下されたのではなからうかと思ひます。果して、理のあるお方のお彈なされる、絃物の調子とその他、管も

の、打ち物等に至るまで一線亂れなき立派な調律が大殿堂に響き流れて、地場の靈氣に緩和するのを耳に致し、それが心の及びまする時、その神々しき音律の中から『理の尊さ』といふ感念が深められてまゐります。

いづれ、ゆく〳〵は此の心の調子が合ふて出來たところの鳴物も一手になる日のあらうことゝは存じますが、本書によつて學ばれる人も、常にこの心の調子を合せるといふ理を忘れずにお勤め下さることをお願ひ申します。

又お稽古の際にも必ず、神様にお願ひ申してから、始めることを怠つてはなりません

編者識

凡例

一、拍子木について

すべてお囃子は拍子木を中心として行はれるべきものと思ふが、お歌の内容を打ち消すおそれがあつてはならず、それで太鼓も、笛も、又拍子木も、その調和のよろしきに於て妙なりと云ふべく、唯拍子木の打ち込みは調子の角度をあやまらざるやう心すべきものとす。

二、太鼓について

太鼓は強からず、弱からず、迫らず、緩まず克く拍子木の角度を耳にして打ち込むを心すべし。右撥、左撥の使ひわけも肝要なり。又小撥（又は女撥とも稱ふ）の數も多からず、少なからず、而して耳障りにならぬやう心せられたし。（但し、かう打たねばならぬといふやうに切りきつてはないのであるが）

太鼓の入れ方によつて絃物の調和を缺くが如きは（ふうふそろふて……）の神意に照して最も慨まざるべからざるなり。

猶ほ●●の中に○印の手は（又ハその打ち方もある）と云ふ意なり。

三、笛について

（イ）調子のアヤといふは、これ節（ふし）といふも同じ意なれど、アヤ多くして卑しさを增す畏れあるは、奏ずるものゝ人格の劣なるを表はすものなれば、克くほど〳〵にアヤなしてこそ技（わざ）妙なりと云ふべし。

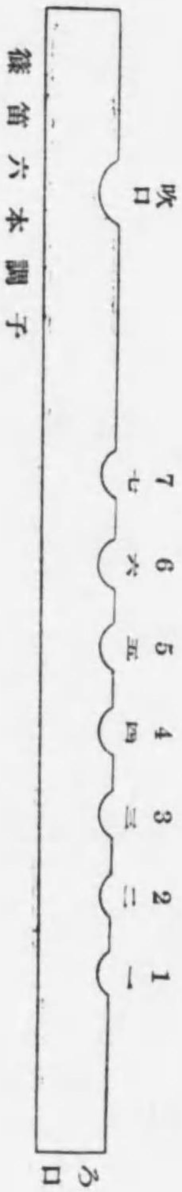
（ロ）笛の譜は二樣現はしたれど數字の二五三といふのは全部琴を主として立てたる調子のゑ、この指穴の運用よろしき時は、地方の聲も自然に緩和せられ、鳴物と歌聲の調和に於て實に天上夢界を辿る思ひを起さしむべし。

（ハ）又、２３５の記號を用ひたるは、琴の調子と全然異りたるにはあらず、唯お國のなまりといふものがあつて語尾の上るところと下るところのある關係上二樣に現はしたるものに過ぎざるなり。故に出來得べくんば、三二五の記號に依りて修得せられんことを望む。（但しお地方によりて手を替へることは自由なり。）

（ニ）記號中（フ二……）とあるは、和音（フクラおん）とも云ひ又（ッおん）ともいふ。その略符號なり。されど活字の組合せ上（フ二……）とお歌の文字とが、そろへかぬるところもあれば、これもお地方を稱へながら合せられたし。又（六七三……）とあるは琴のコロリンと云ふ（シャンとも云ふ）所にして。三に下るトタンに。七を開閉する手なり。

笛の調子は（六本調子）といふ音調の笛を使用せられたし。（但しそれでなければならぬと云ふことなし）これによつて笛の。二と琴の。一とを合せて立てれば二上りの調子となるべし。

左に笛指穴符號を記す



笛 六 本 調 子

猶ほ２３５といふ洋數字を用ひたる指穴に於て６６６、などの場合に於て（タタク）のが普通であるが活字の配置の都合上（タタク）記號を使用し得ざるにより、六ク又は、七クの記號と照合せて（タ、ク）ことの應用をされること自由なり。

―― 凡例了 ――

御かぐら歌鳴物譜 （太鼓、拍子木、笛）

又八〇

あしきをはらふてたすけたまへてんりおふのみこと

ちよいとはなし。かみのいふこときいてくれ。あしきのことおはい

はんでな。このやうのぢいとてんとをかたどりて。ふうふをこ

三 二〃三 二〃 七二〃 三 二〃三 二〃 七二

しらへきたるでな。これはこのよのはじめだし ○ なむ

三 〃 二 六 七 二 〃

てんり おふの みこと

太鼓

（同數にて次の打ち方も可ならん）

ちよいとはなしかみのいふことをきいてくれ あしきのことはいはん

でなこのよふの ぎいとてんとをかたどりて ふうふをこしらいき

たるでなこれはこのよのはじめだし なむてんりわうのみこと

二 〃 〃 三五 三五三 二七二三 〃 二七二 三 二

あしきをはろうてたあすけせきこむいちれつすましてかんろうだい

二 三 〃 二 三 五 三 五 六 七 二 〃 二 三 二 六 〃

2 3 3 2 3 2 3 2 5 6 5 3 2 2 3 2 6 6

よろづよのせかいいちィれつみはらせど

○

5 6 7 7 2 9 7 2 2 3 2 7 6

（フ二七 〃 〃 二 六 七 二 〃 三 二 六 〃

むゥねのわかりたものはない

○

（以下「いちれつにはやく……」まで同手にて返す）

そのはづやといてきかしたことはない
このたびわかみがをもてへあらはれて
このところやまとのぢばあのかみがたと
このもとをくわしくきいきたことならば
きゝたくばたづねくるならゆてきかす
かみがでてなにかいさいをとくならば
いちれつにはやくたすけをいそぐから

てんりをのみこと

一下り目

二2 六7 二2 三3 ゞ3 二2 三3 五5 三3 五2 五5 六6 七5 三3 二2 二2 六7 ゞ6 ●
一ト つしようがつウこゑのさづゥけはやァれめづらしい

しらぬがむりでわないわいな
なにかあいさいをときゝかす
いううてへいれどももとしらぬ
いいかなものでもこいしなる
よろづういさいのもとなるを
せかいゝちれついさむなり
せかいのうこゝろもいさめかけ

二5 七6 ゞ7 ゞ7 二2 六6 七7 二2 三3 五5 三3 五2 五5 六6 七5 三3 二2 二2 六7 ゞ6 ●
二イイに につこりイさづけもろォたらやァれたの もしや

三5 七6 ゞ7 ゞ7 二2 六6 七7 二2 二2 六6 二2 三3 二2 六6 ゞ6 ○●
三アんにさんさいこころをさだめ

四5 七6 ゞ7 ゞ7 二2 六7 七6 二7 三2 五3 三5 五3 五5 六6 七5 三3 二2 三2 ○●
四ヲをつよのなかア五つツ りをォふくウ

六5 五6 六7 ゞ7 二2 六6 七7 二2 二2 三3 二2 六6 ゞ6 ○●
六ウうつむしようにでけまわす

七アなアつなにかにイつくりとるゥならア

八アあつやまとはほうねんや

こゝのつここまでついてこい

十をどとりィめがさだまりた

てんりおふのみこと。てんりおふのみこと

二下り目

とんとんとんとしようォがつウ

をゝどりィはじめはやァれおもしろい

一うたつふしぎなァふしんかかァればやァれにぎわしや

三イいつみにつくウ四をつよなァほりイ

五イつッいづれもつウきくるならば

六ウうつむほんのねえをきろ

七アなつなんじうをすくひあぐればア

八アあつゥやまひのねえをきろ

九つ　こころをォさだめるよゥならア

十ヲ　をでェところのおさまりや

三下り目

（太鼓は前節と同じ）

三 ●三 〃3 ●二 〃2 ●六 ●七 二3 ●〃 ●三 〃3 ●二 〃2 ●六 ●七 ●三 ●二 〃3

てんりわうのみこと　てんりわうのみこと

一 ●二 ●六 ●五 ●六 ●(七 三) ●二 ●二 ●三 ●二 ○六 ●〃 ●フ 二 ●七 ●〃 ●〃 ●二 ●六 ●七 ●二 ●二 ●三 ●二 ○六 ●〃

つ ひ の も と し よ や し き の つ と め の ば し よ う は よ の も と や

二 ●六 ○五 ●三 ●二 ●三 ●五 ●三 ●五 ●五 ●六 ●(七 三) ○二 ●三 ●フ 二 ●五 ●六 ●〃 ●二 ●六 ●七 ●二 ●二 ●三 ●二 ○六 ●〃

つ ふ し ぎ な ア つ と め ば し よ う は ア た ァ れ に た の み は か け ね ど も

三 ●二 ●六 ●五 ●三 ●五 ●六 ●(七 三) ●二 ●二 ●三 ●二 ○六 ●〃 ●フ 二 ●七 ●〃 ●〃 ●二 ●六 ●七 ●二 ●二 ●三 ●二 ○六 ●〃

つ み な せ か い が よ り あ ふ て で け た ち き た る が こ れ ふ し ぎ

四 ●二 ●六 ●五 ●三 ●五 ●五 ●六 ●(七 三) ●二 ●二 ●三 ●二 ○六 ●〃 ●フ 二 ●七 ●〃 ●〃 ●二 ●六 ●七 ●二 ●二 ●三 ●二 ○六 ●〃

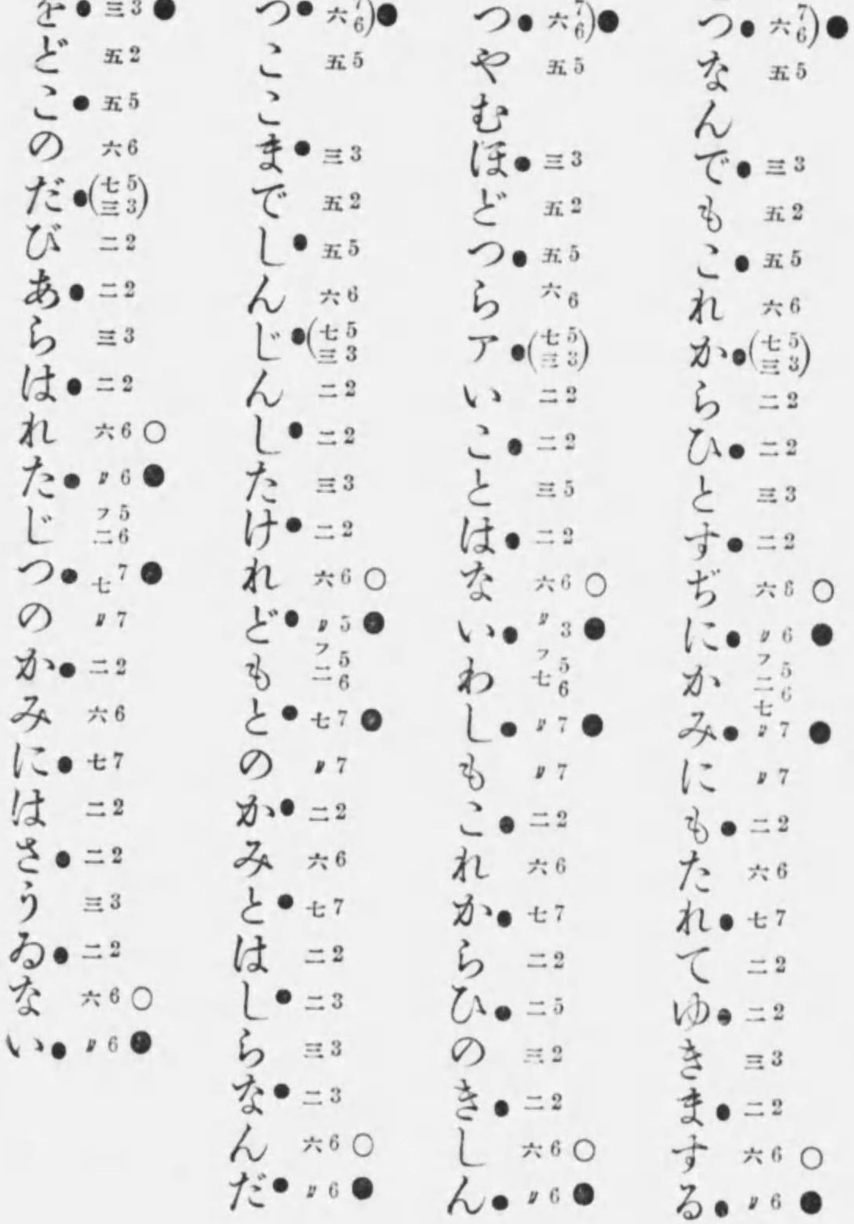
つ よ う よ う こ ゝ ま で つ い て き た じ つ の た す け は こ れ か ら や

五 ●二 ●六 ●五 ●三 ●五 ●五 ●六 ●(七 三) ●二 ●二 ●三 ●二 ○六 ●〃 ●フ 二 ●七 ●〃 ●〃 ●二 ●六 ●七 ●二 ●二 ●三 ●二 ○六 ●〃

つ い つ も わ ら わ れ そ し ら れ て め づ ら し た す け を す ほ る ど に

六 ●二 ●六 ●五 ●三 ●五 ●五 ●六 ●(七 三) ●二 ●二 ●三 ●二 ○六 ●〃 ●フ 二 ●七 ●〃 ●〃 ●二 ●六 ●七 ●二 ●二 ●三 ●二 ○六 ●〃

つ む り な ね が ひ は し て く れ な ひ と す ぢ こ ゝ ろ に な り て こ い



以下殆ど同節に付譜を省く。但し自習の便宜上お歌全首を掲げ、特に手の變る所を記せり。

四下り目

一つひとがなにごといはうとも　かみがみてゐるきをしずめ
二つふたりのこゝろををさめいよ　なにかのことをもあらはれる
三つみなみていよそばなもの　かあみのうすることなすことを
四つよるひるどんちやんつとめする　そうばもうやかましうたてかろ
五ついつもたすけがせくからに　はあやくうよをきになりてこい

六つむらかたはやくにたすけたい
七つなにかよろづのたすけあい
八つやまひのすつきりねはぬける
九つこゝはこのよのごくらくや
とをどこのたびむねのうち

てんりをのみこと　　てんりをのみこと

五下り目

一つひろいせかいのうちなれば
二つふしぎなたすけはこのところ
三つみづとかみとはおなじこと
四つよくのないものなけれども

なあれどうこゝろがわからいで
むうねのううちよりしあんせよ
こゝろはあだんゞいさみくる
わあしもうはやゞまゐりたい
すみきりいましたがありがたい

たすけるうところがまゝあろう
おゝびやあはうそのゆるしだす
こゝろのうよどれをあらひきる
かあみのうまへにはよくはない

五ついつまでしんじんしたとても
六つむごいこゝろをうちわすれ
七つなんでもなんぎはさゝぬぞへ
八つやまとばかりやないほどに
九つこゝはこのよのもとのぢば

5 5 3 2 5 6 5 3 2 2 3 2 6 6
七 〃 二 三 五 六 七三 二 二 三 二 六 〃
どうでもしんじんするならば

てんりをのみこと　　てんりをのみこと

やううきいづくめであるほどに
やさしきいこゝろになりてこい
たあすけえいちじよのこのところ
くにぐにいまでへもたすけゆく
めづらしいところがあらはれた

かうをむすぼやないかいな

六下り目

一つひとのこゝろといふものは
二つふしぎなたすけをするからに

うたがいゝぶかあいものなるぞ
いかなるうことをもみさだめる

三つみなせかいのむねのうち　かゞみのうごとくにうつるなり
四つようこそつとめについてきた　こうれがあたすけのもとだてや
五ついつもかぐらやてをどりや　する忽ではあめづらしたすけする
六つむしようをやたらにねがいでる　うけとるうすぢいもせんすぢや
七つなんぼしん〳〵したとても　こゝろえゝちがいはならんぞへ
八つやつぱりしん〳〵せにやならん　こゝろえゝちがいはでなほしや
九つこゝまでしん〳〵してからは　ひとつのうこうをみにやならぬ
とうどこのたびみえました　あふぎのううかゞひこれふしぎ
てんりをのみこと　てんりをのみこと

七下り目

一つひとことはなしはひのきしん　にほいゝばかりをかけておく

二つふかいこゝろがあるなれば　たあれもうとめるでないほどに
三つみなせかいのこゝろには　でんぢのういらあぬものはない
四つよきぢがあらあばいちれつに　たあれもうほしいであろうがな
五ついづれのかたあもおなじこと　わあしもうあのぢをもとめたい
六つむりにどうせといはんでな　そをこはあめい〳〵のむねしだい
七つなんでもでんぢがほしいから　あたへはあなにほどいるとても
八つやしきはかみいのでんぢやで　まいたるうたねへはみなはへる
九つこゝはこのよのでんぢなら　わあしもうしつかりたねをまこ
とうどこのたびいちれつに　ようこそうたねへをまきにきた
たねをまいたるそのかたは　こうえををおかずにつくりとり
てんりをのみこと　てんりをのみこと

八下り目

一つひろいせかいやくになかに　いゝしもうたちきもないかいな
二つふしぎなふしんをするなれど　たあれにいたのみはかけんでな
三つみなだん〳〵とせかいから　よりきたあことならでけてくる
四つよくのこゝろをうちわすれ　とをくとうこゝろをさだめかけ
五ついつまでみあわせいたるとも　うちからあするのやないほどに
六つむしやうをやたらにせきこむな　むうねのううちよりしあんせよ
七つなにかこゝろがすんだなら　はあやくうふしんにとりかゝれ
八つやまのなかへといりこんで　いゝしもうたちきもみておいた
九つこのききろうかあのいしと　おもへどうかみいのむねしだい
とうどこのたびいちれつに　すみきりいましたがむねのうち

てんりをのみこと　てんりをのみこと

九下り目

一つひろいせかいをうちまわり　いつせんゝにせんでたすけゆく
二つふじゆうなきよにしてやらう　かあみのうこゝろにもたれつけ
三つみればせかいのこゝろには　よをくがあまじりてあるほどに
四つよくがあるならやめてくれ　かあみのううけとりでけんから
五ついづれのかたあもをなじこと　しいあんんさだめてついてこい
六つむりにでようとゆうでない　こうころうさだめのつくまでは
七つなか〳〵このたびいちれつに　しつかりいしあんをせにやならん
八つやまのなかでもあちこちと　てんんりいわうをゝのつとめする
九つこゝでつとめをしていれど　むうのねのをわかりたものはない

とてもかみなをよびだせば　はあやくうこもとへたづねてよ
てんりをのみこと　てんりをのみこと

十下り目

一つひとのこゝろとゆうものは　ちよとにいわからんものなるぞ
二つふしぎなたすけをしていれど　あらはれへでるのがいまはじめ
三つみづのなかなるこのどろう　はあやくういだしてもらいたい
四つよくにきりないどろみづや　こうころうすみきれごくらくや
五ついつ〳〵までへもこのことわ　はなしのうたねへになるほどに
六つむごいことばをだしたるも　はあやくうたすけをいそぐから
七つなんぎするのもこゝろから　わあがみいうらみであるほどに
八つやまひはつらあいものなれど　もうとををしりたるものはない

九つこのたびまでへはいちれつに　やまひのうもとをわしれなんだ
とうどこのたびあらわれた　やまいのうもとをわこゝろから
てんりをのみこと　てんりをのみこと

十一下り目

一つひのもとしよやしきの　かあみのうやかたのぢばさだめ
二つふうふそろうてひのきしん　こうれがあだいゝちものだねや
三つみればせかいがだん〳〵と　もををこうにのをてひのきしん
四つよくをわすれてひのきしん　こうれがあだいゝちこえとなる

五つ(2)いつ(7)いつ(6)まで(5)へ(3)もつ(2)ち(2)もち(3)や(2)ま(6)ァ(6)だ(6)ある(2)ゥ(5)ならあ(6)ばわ(7)しも(2)ゆこ(3)

六つむりにとめるやないほどに　こうころうあるならたれなりと
七つなにかめづらしつちもちや　こうれがあきしんとなるならば
八つやしきのつちいをほりとりて　とをころをかへゝるばかりやで
九つこのたびまでへはいちれつに　むうねがあわからんざんねんな
とうどことしはこへおかず　じふぶんものををつくりどり

七 7 ヶ月 2 日 5 6) 二 2 六 3 七 2 二 2 二 3 三 2 二 6 六 6
やァれたのもしいやありがたや

てんりをのみこと　てんりをのみこと

十二下り目

一ついちにだいくのうかゞいに　なにかのをことをもまかせおく
二つふしぎなふしんをするならば　うかゞひゝたてへていひつけよ
三つみなせかいからだん〳〵と　きいたるうだいくにほひかけ
四つようきとうりやうがあるならば　はあやくうこもとへよせておけ
五ついづれとうりようがよにんいる　はあやくううかゞいたてゝみよ
六つむりにこいとはいはんでな　いゝづれへだん〳〵つきくるで
七つなにかめづらしこのふしん　しかけたあことならきりはない
八つやまのなかへとゆくならば　あゝらきいとうりやうつれてゆけ
九つこれはこざいくとうりやうをや　たてまへゝとうりやうをこれかんな
とうどこのたびいちれつに　だいくのうにんんもそろひきた

てんりをのみこと　てんりをのみこと

— 了り —

324
109

昭和四年七月廿日印刷
昭和四年七月廿六日發行

奈良縣山邊郡丹波市町大字三島八〇
發行兼編輯者　天理教々會本部雅樂部
右代表者　喜多秀太郎

奈良縣山邊郡丹波市町大字川原城三〇九
印刷所　天理教々廳印刷所
右代表者　植田五郎

終